新潮文庫

京都大原殺人事件

山村美紗著

新潮社

京都大原殺人事件

新潮文庫　や－26－1

昭和六十二年一月二十五日　発行
昭和六十三年三月十日　六刷

著者　山村美紗
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六－五一一一
編集部(〇三)二六六－五四四〇
振替東京四－八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社
© Misa Yamamura 1984　Printed in Japan

新潮文庫

京都大原殺人事件

山村美紗著

新潮社版

目次

第一章　呪われた家……七
第二章　容疑者……五八
第三章　浴槽の殺人……一〇四
第四章　第四の殺人……一五三
第五章　アリバイ……一九八
第六章　密室の謎……二四〇
解説　郷原宏

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

京都大原殺人事件

第一章　呪われた家

1

名木麻由子は、新幹線から降りて、京都駅の八条口に立った。

東京に住む彼女は、大学の三年生だが、二月十日までの試験が終って、京都旅行にやって来たのである。

タクシーに乗り、行先を告げた。

「大原三千院へやってください」

運転手は、大きくうなずいて、車を発進させた。

「東京から来はる女の人は、大原へ行かはる方が多おすなあ」

「そう……」

私は、みんなと違うといいたかったが、麻由子は、言葉を呑み込んだ。

彼女は、ただの観光旅行に来たのではなく、恋愛問題で悩み、ふっと、京都の大原を歩いてみたくなったのだ。しかし、考えてみると、みんな、そんな気持で、京都に来るのかも知れない。

車は、東山通りを、北へ北へとすすむ。
大原は、京都の東北の隅にある。
京都駅から十キロほど走ると、そろそろ、郊外へさしかかってくる。あたりの景色も、急に田舎びてきて、畑や、木が多くなってきた。
「雪が舞うてきましたなあ」
運転手にいわれて、はじめて気がつくと、ガラスに、雪があたっている。
「大原って寒いのかしら？」
「おんなじ京都でも、北の方と、南の方とでは、温度が全然ちがいますよってね。天気予報かて、京都北部と南部と、両方出るくらいですワ」
「でも、京都の街に、雪が降ってるのっていいわあ」
麻由子は、窓の外を眺めつづけた。
山が迫ってきて、その頂上には、雪が残っている。枯木と雪がまじりあって、ぼうっとかすみ、墨絵のように美しい。山すその段々畠にも雪が残っている。
ところどころに、藁屋根の形をした家がある。藁屋根の上から、銅板でおおってあるらしかった。
竹林も多い。
奥に行くほど、雪が積っていた。
京都駅から二十キロ近く走ると、三千院だった。

「帰りはどうしはります？　タクシーは、ありまへんで。よかったら待ってますけど」
運転手はいったが、麻由子は断った。
「この近くのお宅で、泊めていただけるの」
「あ、そうですか。そんなら」
確かに、車は、なかなかないらしくて、麻由子が降りると、何人もの客が、駈け寄って来た。
麻由子は、三千院の少し手前から、歩くことにした。
道の両側には、ずらりと店が並んでいる。
民芸調の壁かけや、人形、絵はがき、栞など、女の子が好きそうな小物や、しば漬、陶器などもある。
アベックの男女や、女の子が、一つ一つ見ている。
喫茶店や、食事どころもたくさんある。それも、学生や、ＯＬむきに、おぞう煮とか、湯豆腐、甘酒などが多い。
〈帰りに寄ろう〉
それを楽しみに、麻由子は三千院へ急いだ。
三千院は、高い石段の上に立つ、大きな山門に象徴される壮大な寺院だった。
〈まるで、版画みたいだわ〉
呟きながら、粉雪の舞う石段を、一段一段のぼって山門に入り、玄関に入った。
拝観料は、四百円だった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

僅かしか歩いてないのに、足もとから冷え込んで軀中が、こごえそうになった麻由子は、畳の上敷がしいてある廊下にあがって、ほっとした。

こんな寒さなのに、あとから、あとから、人が入ってくる。若いアベックの男女も目立つが、女性が圧倒的に多い。

順路の矢印に従って、廊下を回り、一つずつ部屋を見て歩く。

竹内栖鳳とか、松年の描いたふすまの前には、説明書がおかれている。

長い廊下を歩くうちに、麻由子は、すっかり冷え込み、手の感じもないようになった。

雪の積った日本庭園をバックに、縁側で、写真をとりたいと思って、みまわしていると、長身の若い男性が通りかかったので、声をかけた。

「すみませんが、シャッターを押していただけませんか？」

その男性は、びっくりしたような顔をしてふりむいたが、すぐに、

「いいですよ」

と、カメラを受けとった。

「もう少し、横に寄って下さい。ああ、その辺がいいな。……あ、すみません。これ、距離合わすのどうしたらいいんですか？」

「えーと、……」

麻由子はもう一度、戻って来て、説明をした。そばへ寄り、肩がふれ合うほどのところへきてみると、色は、浅黒いが、彫りの深い知的な顔の男である。

場所を変えて、何枚か写し、その男のカメラでもとって、二人は、順路を通って、庭へ出た。

「えーと、写真を送りますから、住所と、名前を教えて下さい」

男がいったので、麻由子は、東京の住所と名前を教えた。

「名木麻由子さんですか……」

「あなたは？」

今度は、麻由子がきくと、男は、名刺を出した。名刺には、職業が書いてなかった。

「松田文彦さんですのね。学生さんですか？」

「ええ、京都大学の大学院へ行っています。君も学生さん？」

「ええ。早稲田大学です」

若いだけに、二人は、すっかり意気投合して、話がはずんだ。東京のこと、京都のことなど話しているうちに、社務所がみえてきた。

「おみくじ引くから、ちょっと待ってて」

そういうなり、麻由子は、駈け出した。寺とか神社へ行くと、おみくじをひくのが、小さいときからの癖だった。

五十円で、おみくじを引いてくると、麻由子は、息をはずませて、封を切りはじめた。

「おみくじなんて、大抵、大吉なんじゃありませんか？」

笑いながら、松田がいい、それでも、興味ありげにのぞき込んだ。

「そうかも知れないけど……」
そういって、同じように笑っていた麻由子の手が、突然、とまった。
おみくじは、凶だった。

2

「気にしないでいいですよ。木に結んでおいたらいいんじゃないですか。しかし、おみくじに、凶があるって知らなかったなあ」
しばらくして、松田がいった。
「私もよ。生まれてはじめて凶のおみくじを引いたわ」
それほど気にしてないようにみせながらも、内心は、複雑だった。
〈やっぱり、タケシとは駄目なんだわ〉
タケシというのは、東京にいる恋人だった。彼には、結婚の意志がないことが、はっきりしたから、京都に来たのだが、まだ、未練があった。
「さあ、木に結びましょう」
松田が、おみくじをとって、木に結びつけた。
社務所から折れまがると、もとの入口に戻ってくる。
寺の前には、たくさんの土産物店や、茶店、食事どころが並んでいた。
「どうしますか？　京都市内まで行くのだったら、送りますよ。車を持って来てるから」

「いえ、この近くで、泊めてもらう家があるんです。今、何時かしら？」
麻由子が、オーバーの袖をまくりあげて、時計をみようとすると、先に、自分の時計を見た松田が、
「四時ですよ」
と、いった。
「じゃ、一時間あるわ。むこうの家には、五時っていってあるから」
「では、何か食べますか？　寒いし……」
松田は、店の方を見た。
「そうしましょうか。寒くて、こごえそう」
麻由子は、本当に寒くて失神しそうだった。
しかし、店の中は混雑していて、二人一緒に座る席がない。仕方なく、二人は歩きはじめた。
店は、たくさんあるが、さっきほど、暖かそうで、品数の多い店は、なかなかない。
「ちょっと待って。寒くて、寒くて」
麻由子は、道端にかがんで、足をさすった。そのとき、松田が、
「あっ、あそこへ入りましょう。炬燵喫茶と書いてあります」
と、指をさした。
「えっ、炬燵？」

それは、「大原女（おはらめ）」という喫茶店で、外見は、普通の喫茶店だったが、中に入ると、席のところどころに、畳敷きのところがあって、可愛いふとんをかけたホーム炬燵がおいてある。

一つだけ空いていた。その炬燵に入ると、ふわっと、暖かさが、足を包んだ。

「ああ、あったかい、よかったア」

麻由子は、暖かさをかみしめた。やっと人心地がつき、松田の方をみると、彼は、炬燵に入らずに、きちんと、正座している。

「あ、ごめんなさい。どうぞ、入って下さい」

そういって、麻由子は、足をひっこめた。

メニューをみると、コーヒーなどの喫茶以外に湯豆腐や、釜（かま）あげうどん、おにぎり、甘酒などがある。

二人は、湯豆腐をとって、食べながら、話をした。

しばらくして、松田が、

「このあたりに、お知り合いがあるんですか？」

ときいた。さっき、麻由子が、そこに行くといったからである。

「ええ。ちょっとしたことで、東京で知り合ったんですけど、京都に来たら、泊めてあげるといわれたので、お世話になろうと思っているんです」

と、麻由子は、世話になる人の話をした。

それは、麻由子が、東京の百貨店で、夏に、アルバイトをしているとき、客として来て知

り合いになった水尾悠子（ゆうこ）という中年の女性だった。麻由子を可愛がってくれ、京都に遊びにいらっしゃいといってくれたので、今度来ることになったのである。

「水尾さんですか？」

「ええ、ご存知ですか？」

「名前は、きいたことがあります。昔、このあたりの豪族だった家ですね」

「あら、そうなんですか？　知らなかったわ」

麻由子は、水尾悠子と、何度か、手紙のやりとりをしたり、電話で話したが、一度もそんな話は出なかった。

「謙虚な人なのね」

「京都の人は、あまり家のことを話しませんからね」

喫茶店を出て、二人は、水尾家に車をとばした。

北山杉（きたやますぎ）がしげる道をすすみ、竹林がしばらく続いたあと、水尾家についた。

「わア、大きな門ね。三千院の門より大きいわ」

屋根のついたその大きな門には、「水尾」と上品に墨で書かれた表札がかけられていた。

ベルを鳴らすと、応答があり、

「今、あけますよって、待っておくれやす」

と、女の声がした。

門の中は、広い庭で、樹木がいっぱいに茂っている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com